九条家入札会の目録と主催者内部資料

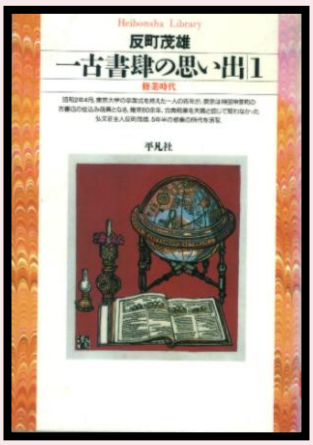
―『一古書肆の思い出』とともに―

はじめに

『一古書肆※の思い出』は古書店主・反町茂雄(1901―1991)が自身の思い出をつづった本です。彼が古書の魅力に気づき貴重な本・珍しい本を扱う古書店「弘文荘」を創業するまでの経緯や、古書をめぐる様々な人との出会い、後に国宝となるような古典籍の発見など、反町の人生における色々なエピソードが語られています。

※古書肆とは、古書店のことです。

今回は、その中でも彼の人生に大きな影響を与えた出来事として、昭和4(1929)年に開催された九条家の蔵書の入札会をご紹介します。九条家は鎌倉期から続く名家で、数多くの貴重な和本や漢籍などの古典籍を所蔵していました。当時、洋本の販売に力を入れていた反町は、九条家入札会により和本の魅力に気づき始めます。



「九条家本目録」等の主催者内部資料と『一古書肆の思い出』の生き生きとした文章で、九条家入札会の様子をお楽しみください。

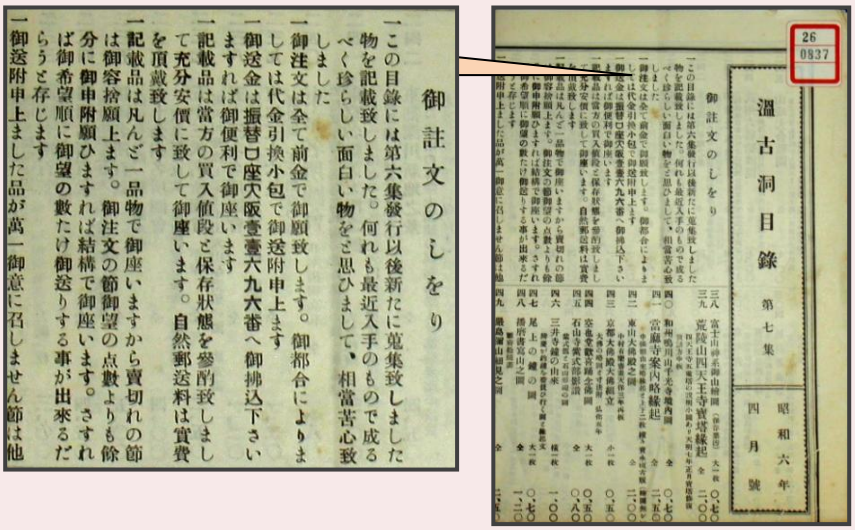
『一古書肆の思い出』 全5巻

反町茂雄／平凡社／1998～1999年
【区民の書斎／024.8】

● 古書販売の方法

古書販売と聞くと、古書店での店頭販売を真っ先に想像するかもしれません。しかし、古書販売の方法はそれだけではありません。古書販売には、主に次の四つの方法があります。

販売名	方法	古書販売 価格の明示	古書の流れ
店頭販売	店頭での販売	あり	店 → 客
通信販売	カタログを客に送り、注文を受ける販売	あり	店 → 客
即売会	数店の古書業者が集まり、 古書会館や百貨店の会場等での販売	あり	店 → 客
市会(交換会) 入札会	古書会館などの会場で行われる 古書業者間での売買	なし	店 ⇔ 店



御註文のしをり

一この目録には第六集發行以後新たに蒐集致しました物を記載致しました。何れも最近入手のもので成るべく珍らしい面白い物をと思ひまして、相當苦心致しました

一御注文は全て前金で御願致します。御都合によりましては代金引換小包で御送附申上ます

一御送金は振替口座大阪壹壹六九六番へ御拂込下さいますれば御便利で御座います

一記載品は當方の買入値段と保存狀態を參酌致しまして充分安價に致して御座います。自然郵送料は實費を頂戴致します

一記載品は凡んど一品物で御座いますから賣切れの節は御容捨願上ます。御注文の節御望の点數よりも餘分に御申附願ひますれば結構で御座います。さすれば御希望順に御望の數だけ御送りする事が出來るだらうと存じます

一御送附申上ました品が萬一御意に召しません節は他

26
0837

温古洞目錄 第七集

昭和六年四月號

通信販売

「温古洞目録 第７集」

（温古洞、昭和 6(1931)年）

通信販売用のカタログとして作られた古書販売目録。上段に、購入の仕方等が記載されている。

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【書店別１－26－837】

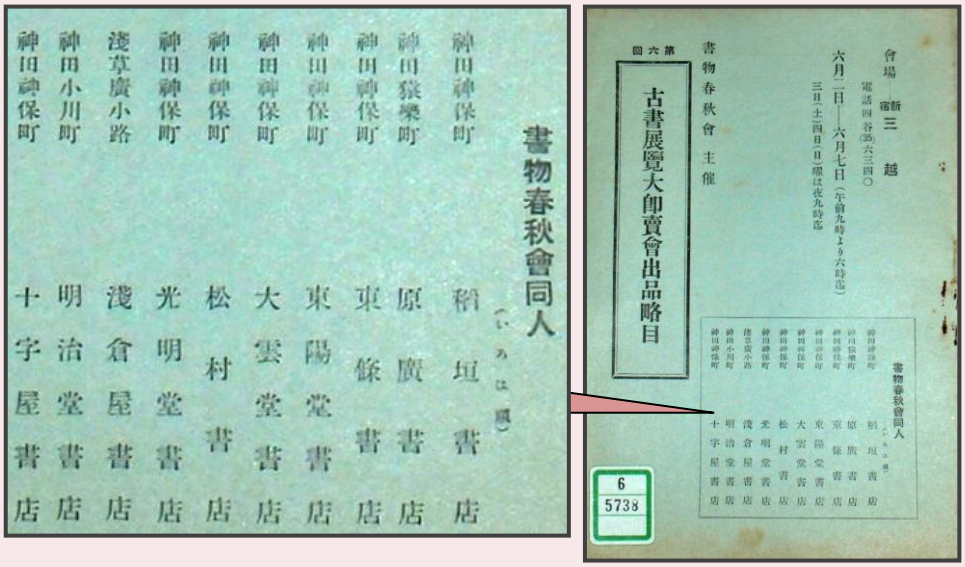
即売会の出品目録

「古書展覧大即売会出品略目」

（一誠堂書店、昭和4(1929)年）

複数の古書店が集まる即売会の出品目録には、出店名が並べられる。

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【即売会－6－5738】



書物春秋會同人（いろは順）

神田神保町 稲垣書店
神田猿樂町 原廣書店
神田神保町 東條書店
神田神保町 東陽堂書店
神田神保町 大雲堂書店
神田神保町 松村書店
神田神保町 光明堂書店
淺草廣小路 淺倉屋書店
神田小川町 明治堂書店
神田神保町 十字屋書店

會場 新宿三越
電話四谷(35)六三四〇
六月一日―六月七日（午前九時より六時迄）
三日（土）四日（日）は夜九時迄

書物春秋會 主催

第六回
古書展覧大即賣會出品略目

6
5738

- **入札会とは**

九条家入札会の「入札会」とは、最高価格を提示した店が落札する販売方法です。

➢ **入札の回数**

基本的に一つの品に対し入札は一度しかできません。

➢ **入札会の種類**

入札会は、古書店（主催者）が顧客などから購入した古書を売るための入札会と、委託された古書を扱う入札会との大きく二つに分けられます。購入した古書を扱う場合でも、古書相場の確認や、店頭で販売するより価格が上がるという理由で、入札会の主催者が入札に参加することもありました。

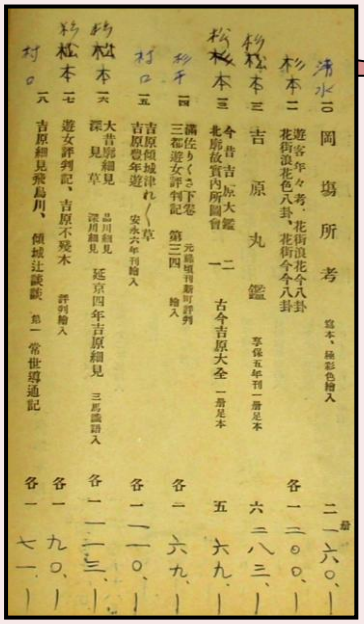
➢ **入札会の参加者**

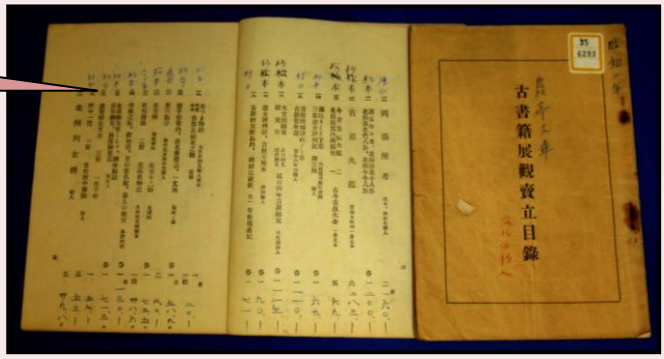
古書関係の業者が集まり、業者間で売買を行う販売のため、一般客は参加できません。ただし、入札会の事前に催される下見会に一般客が参加できる場合もあります。一般客は、出品された書物で気に入ったものがあれば、なじみの古書店に入札会での入札を依頼しました。

➢ **入札会の出品目録**

出品目録により、書物のタイトルや冊数は事前に参加者に知らされます。しかし、価格は入札会で決まるため、通信販売用目録や即売会の出品目録とは異なり、入札会の出品目録には価格が記載されていません。

千代田図書館の古書販売目録コレクションには、反町の書入れがある入札会の出品目録もあり、当時の古書の落札価格を知ることができる貴重な資料となっています。





入札会の出品目録

「古書籍展観売立目録(渡辺霞亭旧蔵本)覧大即売会」
(鹿田静七ほか、昭和 2(1927)年)
入札会の出品目録には、価格の記載がない。そのため、古書の相場や出品物が最終的にどの古書店に渡っていったのかは、当時の書入れがなければ、知ることができない。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－35－6293】

● 反町が勤めた一誠堂

昭和に2(1927)年、東京大学法学部を卒業した反町は、出版業界への就職を考え、岩波茂雄が古書販売から始めて出版社を立ち上げたことに倣い、古書店・一誠堂書店に就職します。もともと知識が豊富だったこともあり、洋書については他に秀でた知識を身につけ、すぐに主人に一目置かれるようになりました。

一誠堂書店は、明治36(1903)年に創業されました。大正12(1923)年の関東大震災の際には、焼土の神保町で最初に販売を再開した古書店です。皆がまだ震災の混乱から立ち直っていない中、焼け跡にテント張りの店をいち早く立て、古書店復興の一番槍として話題になりました。 震災後の復興に際し、焼失した備品を買い集めようとする官庁、学校、図書館などから注文が殺到し、古書の値が急騰しました。これにより急成長した一誠堂は、昭和6(1931)年に地上4階、地下1階のコンクリートのビルに

『古書肆 100 年』(一誠堂書店発行、2004 年)

大正 14(1925)年、震災後に建てられた一誠堂の店舗。

【セカンドオフィス／出版流通/024.8 イ】

建替えました。現在、神保町１丁目７番地にある一誠堂の建物は、このときに建てられたものでした。

九条家入札会は一誠堂書店で働き始めて2年目に、反町が担当した入札会です。

「一誠堂書店新築落成記念絵はがき」（一誠堂書店）
昭和 6(1931)年に建てられた、地上 4 階地下 1 階の一誠堂の外観がみられる。

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【その他－14－6798】

● 名家・九条家

九条家は平安時代末頃に京都の九条の地に邸宅を構えていたことにより、九条と呼ばれるようになった家柄です。鎌倉時代以後、摂政関白に任じられた五摂家の一つです。宮廷と密接な関わりを持っていた名家である九条家には、多くの貴重書が所蔵されていました。中には現在、国の重要文化財となったものもあります。そのようにたくさんの古写本※類が集まったのは、戦国時代、九条家の一族に『源氏物語』の注釈書を手がけた優れた学者がいたためだろうと、反町は述べています。

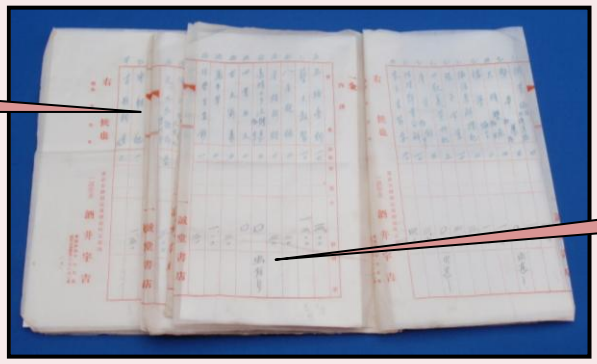
※古写本とは、主に室町時代ごろまでの、手で書き写された本を指します。

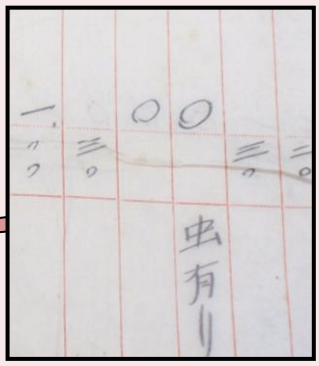
● 九条家の蔵書の見積りへ

昭和4(1929)年11月、反町は一誠堂の主人と、先輩の横川精一とともに九条家を訪れ、その蔵書の一部を見積もりました。一誠堂書店に入ってまだ2年目だった反町は、和本の知識はあまりありませんでした。

> 先ず横川さんが、片端から大急ぎで、特製の複写罫紙に、書名と冊数を記入し、一枚終わる毎に私に渡す。その間に本を調べて、罫紙を受けとると、すぐ下に、思い浮かぶ評価金額を書き入れ、下欄に「巻三欠」とか、「虫あり」「大虫くい」とか注記する。価格のすぐ脳裡に浮かばぬものは、「精どん、これいくら位ですか」と質問する。古くて難しいもの、値の高そうなものに出逢うと、一々主人に相談しました。　（『一古書肆の思い出』第1巻より）

九条家の蔵書の見積りで作成したリスト「九条家本目録」には、書名と評価額、状態が記載されています。





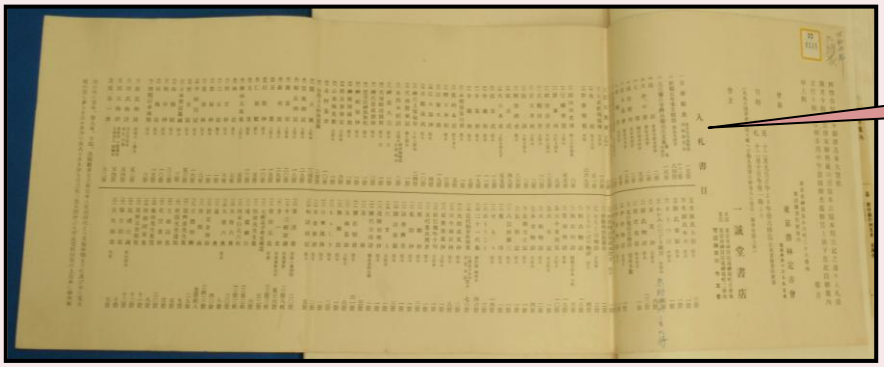
「九条家本目録」（一部分）　（一誠堂書店、昭和4(1929)年）

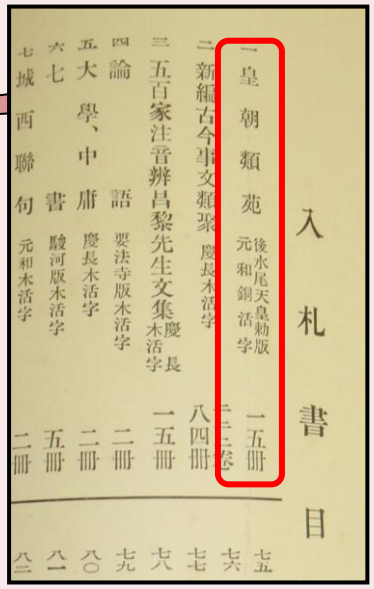
左は書名と巻数の記載、右は反町のメモと価格の記載です。中には、価格が明確に記載されていないものもあります。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－2－6116】
※『反町茂雄収集古書販売目録精選集』第4巻に収録

● 入札会目録と勅版『皇朝類苑』

入札会を行う際には、事前に出品目録を作成し、古書業者や顧客に送ります。九条家入札会においては、出品する書物の一部を記載した略目録を反町が作成しました。この筆頭に掲げられた『皇朝類苑』について、最初は反町も一誠堂の人々もその価値には気づいていませんでした。九条家の蔵書を見に訪れた古書店・井上書店の主人の指摘に、一誠堂の者はそろって驚きました。





「九条家御所蔵古版本古写本類入札書目」
（一誠堂書店、昭和4(1929)年）

反町が入札会のために作成した略目録。「七九　わかみにたどる姫君古写本五冊」の部分に、修正が書き込まれています。大きさ、体裁、本文の筆跡まで同一の書物が続いたため、最初の仕分けの際に誤って 5 冊としましたが、正しくは『我が身にたどる姫君』4 冊と『恋路ゆかしき大将』 1 冊でした。

千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－33－6115】
※『反町茂雄収集古書販売目録精選集』 弟4巻に収録

「これは君、後水尾天皇の勅版だよ」と、大型の十五冊本を持ち出して、主人に示す。外題は『皇朝類苑』としてある。「エッ、勅版」と、主人は首を伸ばす。私には、勅版が何だか、十分には理解はとどかないが、大変なものらしい。第十五冊目を取りあげて、最終のページを示しながら、「ホラ、この通り『元和七年六月、前南禅臣僧瑞保謹書』と、年記と署名があるだろう。ここのところ（その行の文字を指先でたどりながら）に『宸眷』何とかとしてある。これが勅版のしるしだ。銅活版だよ。滅多に見られない本だ」。主人はビックリして、本を受けとって、あちこちページをめくる。

（『一古書肆の思い出』第1巻より）

勅版とは、天皇の勅命によって刊行された書物のことで、とくに後陽成天皇、後水尾天皇が刊行した十数種の活字印本を指します。朝鮮から入った活字印刷技術によるもので、日本の出版事業に大きな影響を与えました。

● 注文殺到

貴重な書物をたくさん所蔵している九条家の旧蔵書と聞いて、東大の国文学研究室の若い先生方が次々と一誠堂に来店し、出品される書物を見て、多くの注文を行いました。

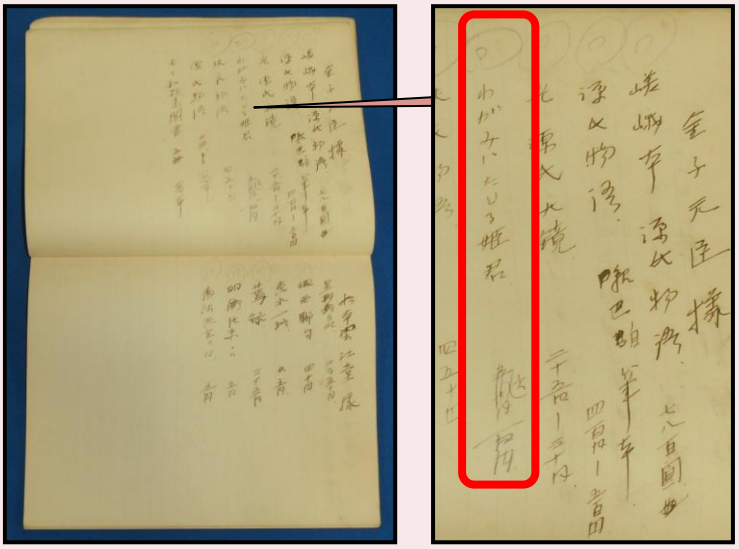
中でも人気だったのは、『我が身にたどる姫君』と『恋路ゆかしき大将』。この2タイトルは、当時の学界でほとんど存在が知られていなかったものです。源氏物語の研究で有名な池田亀鑑が一誠堂を3度訪れ「七十円から八十円くらいまでに」という高額を示しました。『古今和歌集評釈』『枕草子評釈』等、多くの古典の注釈書を著した金子元臣が「百円」。ちなみに、当時の慶應義塾大学の年間授業料が140円でした。金子は一誠堂の得意客で国語、国文学系の古典籍の大収集家としても知られていました。さらに、出版社、第一書房を創業した長谷川巳之吉からも値段は「然るべく任せる」といって注文を受けました。長谷川は古美術品には関心を持っていましたが、普段古写本は買わなかったため、そんな彼からの声がけに一誠堂は驚いたようです。

> サアテ、いよいよ困りました。九時頃に又電話。今度は金子先生。これも亦「主人に」。電話器を置くと、憮然として、「『我が身』は、昨夜百円と指定したが、値段はいくらでもよい。必ずとる様に、だってさ」。うれしさよりも、むしろ困却の表情。とたんに下拙の腹は決まりました。「値はいくらでもいい。ゼヒに」という注文は、トランプ遊びにたとえれば、スペードのワン。オール・マイティーです。「金子先生のためにとりましょう。長谷川さんには、すみませんが謝って下さい。池田さんには私がおわび致します」。（『一古書肆の思い出』第1巻より）

「九条家旧蔵書入札会注文受控エ」の金子の注文が書かれた頁には、『我が身にたどる姫君』の上に◎印がついています。金子のために落札するという一誠堂の姿勢を表したものであると考えられます。

「九条家旧蔵書入札会
注文受控エ」
（一誠堂書店、昭和4(1929)年）

千代田図書館所蔵
「古書販売目録コレクション」
【入札会 2－6114】



● 『我が身にたどる姫君』の入札

当時の入札の方法は「椀伏せ」※でした。漆塗りのお椀の内側に値段を書いて、進行役である中座に投げ、最も高い値段を書いた者が落札できるという入札方法です。椀に値段は一つしか書くことができません。書き終わると中座に向かって値段が見えないように椀を伏せて投げます。また、1つの店に対し、椀は1つしか用意されないため、1つの品に1度しか入札できませんでした。そのため、品の相場が分からないと、なかなか落とすことができません。

「椀伏せ」の入札会で使用した道具　東京古典会所蔵

椀と引き出し状の小箱に入った硯、筆、墨、濡れた布で1セットで、参加する各古書店に配られます。椀の内側に墨で金額を書き、1回の入札ごとに布で拭って、書き直します。　椀の底には、古書店名を書きました。「反町」とあるのは、反町が創業した古書店「弘文荘」を示しています。

※「椀伏せ」については、古書店 「誠心堂書店」店主、橋口侯之介氏が「古本屋の仕事場から　7　昔の市場　椀伏せの再現」にて詳しく紹介しております。

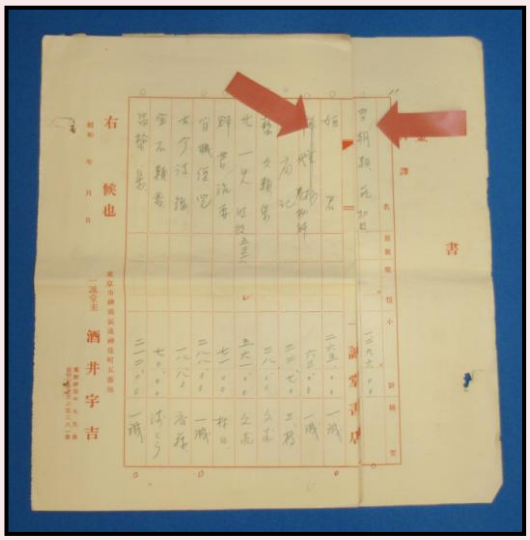
一誠堂は出品目録の筆頭にある勅版『皇朝類苑』を、高木利太（大阪在住で関東でも知られていた古版の地誌の収集家）から注文を受けていました。一誠堂は『皇朝類苑』を当時としては大変高額な1，296円で落札しました。しかし、九条家入札会は大激戦で、他の注文品は思ったようには落札できなかったようです。

また、一誠堂内でも注文が殺到した『我が身にたどる姫君』の入札の様子について反町は以下の様に述べています。

『我が身にたどる姫君』と『恋路ゆかしき大将』の口の入開札の際は、人気殺到、中座（開札担当者）に向かって投げ入れられる堅い木質の入札椀の数は、断然と他を引き放して多く、椀の上に椀が落ちて、カチカチと響く。刺激に意は昂って、算当を超えた高値を書くと、ソッと主人にお見せする。小さくうなずかれたのに力を得て、投入。「南無大師遍照金剛、我が入れ札に幸あらせ給え」。平素、私は入札の速い方ですが、このときは最も遅れました。

「二百六十五円、一誠さん」。中座の井上さんも、やや昂奮気味に読み上げる。と、一座にザワザワと小さなどよめきが渡りました。

（『一古書肆の思い出』第1巻より）



「九条家本目録」（一部分）

（一誠堂書店、昭和4(1929)年）

「姫君」は『我が身にたどる姫君』の省略です。入札に出品された書物のタイトルと落札価格、落札者が記載されています。

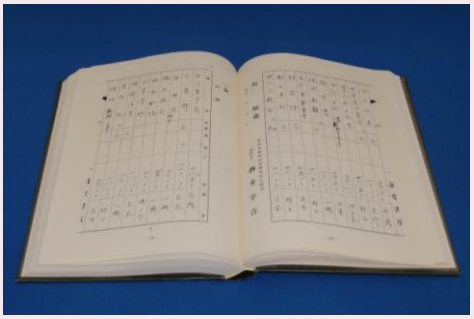
千代田図書館所蔵「古書販売目録コレクション」【入札会－2－6116】
※『反町茂雄収集古書販売目録精選集』 第4巻に収録

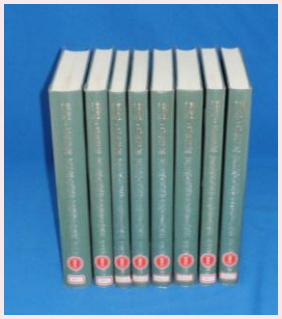
九条家の入札会は、多くの古書に高値がついたため、古書業界や一誠堂にとって一時期を画する重大な意味を持ちました。さらに、反町の将来にも計り知れない影響を与えました。その九条家入札会の様子について、入札会の目録や主催者内部資料と『一古書肆の思い出』の引用文からご紹介しました。

● 千代田図書館蔵　古書販売目録コレクション

通信販売、即売会、入札会のおりには、古書店は販売カタログである古書販売目録を作成します。しかし、一時的な利用を目的とした販売カタログであるため、長期間保存されることは滅多にありません。しかし、過去の古書販売目録からは、その時点で存在していた古書の概要や値段の変遷などを知ることができ、またその時々の書物の流通の手がかりを得ることができます。1点1点の稀少性というよりは、コレクションとして集まることにより、出版文化史を研究する上で重要な意味を持つ資料です。

千代田図書館所蔵の古書販売目録コレクションの大部分は、反町が収集していた様々な古書店の古書販売目録です。この一部は、ゆまに書房から出版されている『反町茂雄収集古書蒐集品展覧会・貴重蔵書目録集成』、『反町茂雄収集古書販売目録精選集』に収録されています。今回紹介した「古書籍展観売立目録」は『反町茂雄収集古書販売目録精選集』の第2巻、「九条家本目録」と「九条家御所蔵古版本古写本類入札書目」は第4巻に掲載されています。





(左)「反町茂雄収集古書販売目録精選集」全 10 巻
柴田光彦編／ゆまに書房／2000 年
【参考図書コーナー／025.9】

(右)「反町茂雄収集古書蒐集品展覧会・貴重蔵書目録集成」全8巻
柴田光彦編／ゆまに書房／2001 年
【参考図書コーナー／025.9】

古書販売目録コレクションは、通常は閉架書庫に保管しており、どなたでもご覧いただけます。※検索には、図書館ホームページ内「古書販売目録検索システム」をご利用ください。くわしくは、図書館職員までお問い合わせください。

※一度に 10 点以上の古書販売目録を閲覧する場合は事前の申請が必要です。
資料の劣化や整理作業のため閲覧いただけない場合があります。

〈場所〉 千代田図書館 9F ミニ展示コーナー
〈期間〉 2010 年 7 月 26 日(月)～9 月 25 日(土)
〈主催〉 千代田図書館
〈協力〉二又淳氏(明治大学非常勤講師)、八木壯一氏(八木書店)、橋口侯之介氏(誠心堂書店)、東京古典会、一誠堂書店、日本古書通信社

本資料は展示の内容をもとに作成しました。無断転載はご遠慮ください。